

バンコクに拠点をおく日本語ガイドに求められるもの
——ベテランガイドへのインタビューに基づいて——

千葉真人・高田知仁

1. はじめに

野田(2005:1-2)が指摘しているように、現在の日本語教科書の多くは、まず教えるべき文法形式を考え、次にそれを使う場面を作るという方向で作られている。しかし、本来文法を学ぶことそれ自体は「目的」ではなくコミュニケーション上の「手段」である。つまり、コミュニケーションの目的があり、その機能を果たすための文法を考えるという方向であるべきである。また、日本語教科書と実際の日本語使用を比較調査し、それらに相違点があることを明らかにした研究もある(清 2003、清 2006 など)。このように見ると、学習者にとって「使わない」あるいは「使えない」ものを学習していることになり、貴重な学習時間のムダであるとも言える。特に外国において選択科目として専門日本語を学習しているような学習者(例えばタイの大学のホテル観光学科の学生)には「どんな場面で何をどのように言わなければならないか」を考慮した必要度の高い内容を教えることが重要であろう。羽太・上田(2008:42-43)が指摘するように、専門的な語彙や表現を初級から教えようとする場合、「何を捨て、何をどのように強化するのか」を考えなければならない。日本語教育学会編(1991:10-11)によるとコースデザインの一つの段階である目標言語調査は「日本語教師が日常無反省に教えがちな日本語を一度実際の使用場面に引き戻して見つめ直してみるきっかけを与えてくれるという意味でも重要」である。そして、具体的な調査方法としては実際の場面において録音調査をして文字化するのが理想ではあるが、最低限教師の頭の中で想像するだけではなく「使用場面の中に身を置いて体験する」ことが重要だとしている(日本語教育学会編 1991:11)。

タイにおける観光用(または観光サービス)日本語のシラバス作成の過程に関しては長町他(2006)や森(2008)などで報告されているが、実際の場面での日本語使用を調査したとは述べられていない。また、タイでのガイド用日本語教科書として出版されているものに ศาสุมิ และคณะ(2001)、ศาสุมิ และคณะ(2002)、高田・千葉(2007)があるが、何を基準に場面や文型などを選んだか明らかにされていない。一方、直接タイでの観光用日本語シラバスに関係するものではないが、カンタス航空のグラウンドスタッフ用日本語コースを作成した Mulvihill(1992)、マダガスカル人日本語ガイド用の観光日本語シラバスを作成したラクトマナナ(2006)、グアム大学での観光およびホスピタリティ産業用日本語カリキュラムを作成した Iwata(2009)のような研究がある。これらはいずれも実際の場면을観察・録音したり、ガイドやスタッフなど実際にその場面に関わっている人々に対する質問紙調査や面接調査などを行っている。タイにおけるガイド用日本語シラバスや

カリキュラム作成(特に学習時間が限られている学習者用)にもこのような視点が必要であろう。つまり、タイでガイドの仕事に関わる日本語ガイド自身やガイドの雇用者(旅行会社)や日本人観光客の視点を取り入れた調査をし、最低限何を教えなければならないかを選択する必要があると考えられる。本稿では、前述の3者(ガイド、旅行会社、日本人観光客)のうち、ガイドにインタビューした結果について報告し、得られた結果を基に今後のガイド用日本語シラバス・カリキュラム作成に対する提言を行いたい。

2. 調査の概要

本調査の目的は以下の3点を明らかにすることである。

- (1)ベテランガイド(以下、EG: Experienced Guide)がよく日本人観光客を案内する観光地
- (2)EGが考えるガイドとして必要な能力や知識
- (3)日本人観光客によくあるトラブルとそれに対する対処法

なお、本調査におけるEGとは「タイにおいて日本語ガイドとして10年以上働いている人」と定義する。また、本調査における「観光地」とは「観光客が特定の目的のために行く場所」と定義し、これには「寺院」(観光のため)や「土産屋」(買い物のため)などを含むこととし、「車内」(移動するのに必要)や「ホテル」(宿泊のために必要)などは含まないこととする。また、ガイドが案内するという性質上、「観光客」とはツアー客を指し、個人客は含まない。

2009年2月から5月にかけて10人のEGを対象に半構造化面接法による調査を行い、ICレコーダーに録音した。10人中9人はタイ語母語話者、1人はタイ人との婚姻によりタイ国籍を取得した日本語母語話者であった(EG4)。日本語ガイドとしての経験は平均約21年(SD=約6.6年)で、EG4を除く9人中5人が日本で日本語を学習した経験があった。

調査の手順は以下の通りである。

- (1)まずタイ全土を、バンコク、バンコク以外の中部(東部と西部を含む)、南部、北部、東北部の5つの地域に分けた。さらに、下位分類として寺院、王宮、市場などに分け(例えば「バンコクの寺院」、「バンコクの王宮」、「バンコクの市場」)、それぞれについて日本人観光客を案内したことがあるかどうか尋ねた。案内したことがある場合はその頻度を尋ね、さらに最後に案内したのはいつかも尋ねた。これは「昔はよく行ったが今は行かなくなった」という観光地を除外するためである⁽¹⁾。
- (2)次に日本語ガイドとして必要な能力・知識を「読む能力」、「書く能力」、「敬語の能力」のような言語的能力と「日本的マナー」、「ホスピタリティー」など言語外の能力・知識に分けて質問した。
- (3)最後に日本人観光客がよく起こす、または巻き込まれるトラブルについて尋ね、さらにそれを防ぐ方法や起きた場合の対処法についても質問した。

EG の職業柄か話し上手の人ばかりで、一人当たりのインタビュー所要時間は約 2 時間半から 4 時間であった。このため、観光地以外にどのような場面(空港からホテルへ向かう車内など)があるかについても調査する予定であったが、調査することができなかった。今後の課題としたい。

3. 結果と考察

3.1 観光地

ここでの目的は、限られた学習時間の中で学習者が最低限どの観光地について勉強する必要があるかを知ることである。そこでまずは、10 人の EG 全員が「必ず」または「よく」連れて行くと回答した観光地(以下「最重要観光地」)を見ることとする(表 1)。

表 1 11 の最重要観光地

地域	分類	観光地
バンコク	寺院	エメラルド寺院(ワットブラケオ)
	寺院	涅槃仏寺院(ワットポー)
	寺院	暁の寺院(ワットアルン)
	王宮	バンコク王宮
	買い物	様々な店(免税店、デパートなど)
	ショー	ニューハーフショー
中部	寺院	プラシーサンペット寺院
	寺院	マハタート寺院
	王宮	バンパイン離宮
	テーマパーク	ローズガーデン
	市場	ダムヌンサドゥアク水上マーケット

最重要観光地と言えるのはバンコクと中部の 11 の観光地のみであった。ただし、これは南部、北部と東北部の観光地が重要ではないということではない。調査の結果わかったのは、南部や北部に日本人観光客が行く場合、バンコクに拠点を持つガイドの仕事は、観光客を現地(プーケットやチェンマイ)のガイドの手に委ねるまでであり、基本的に案内はしないということである。東北部に関しては、ツアー自体の頻度も中部よりは低く、かつバンコクからガイドが案内する場合でも、3~4 日間のツアーになることが多く、運転手(通常は男性)共々現地で宿泊しなければならないため女性ガイドはあまり行かないようである。これらの理由により、最重要観光地がバンコクと中部のみになったと考えられる。

この結果を先行研究(長町他 2006、森 2008、กาญจน์ และคณะ 2001、2002、高田・千葉 2007)と比較

してみると、黄金の山寺院(ワットサケート)、大理石寺院(ワットベンジャマボピット)などは重要度が比較的低く、初級段階では教えなくてもよいと言えよう。また、バンコク国立博物館やエーシヤントシティー(ムアンボーラーン、サムットプラカン県)などは日本人観光客がほとんど行かない観光地であり、優先順位が低いと言える。

これら最重要観光地を組み込んだ場面シラバスの教材としては、「3泊4日のツアーで来た観光客を案内する」という形が考えられる。例えば、1日目の夜にバンコクに到着し、2日目はバンコク市内観光およびデパートでの買い物、ニューハーフショー、3日目はアユタヤ観光および免税店での買い物、4日目の午前から午後にかけてダムヌンサドゥアク水上マーケットとローズガーデンを回り、夜に日本へ帰るというツアーである。当然これら以外に「空港での出迎え」、「ホテルでのチェックイン」などの場面を加えなければならないが、これは今後の課題としたい。

3.2 必要とされる能力と知識

3.2.1 読む能力

ガイドにとって4技能のうち話す能力と聞く能力が必要なことは明白であるが、読む能力と書く能力についてはどうであろうか。まずは、読む能力について検討してみたい。

読む能力に関して10人中8人のEGが必要であると答えた。何に必要かと言う質問に対し8人全員が「予定表を読むため」と回答している。比較的好くあるケースとして、ガイドが持っている予定表(英語か日本語)と日本人観光客が持っている予定表(日本語)が食い違っていることがある。その場合、両者を比較・確認するためには日本語を読める必要があるという。特に、帰りの飛行機の便は間違いが許されない。また、本来予定に入っているはずの観光地をガイドが案内しないとなるとクレームの対象となる。日本語が読めなくても観光客に読んでもらうという方法が考えられるが、「そのようなことで客の手を煩わせるのは恥ずかしい」という意見もあった。その他、予定表以外に読む機会があるものとして半数のガイドが挙げたものにガイドブックがある。観光客が、予定にない観光地に行きたい場合や自由行動の間に自分たちだけでどこかへ行きたい場合、ガイドブックを一緒に見せることが多い。たいてい写真もあり、場合によっては英語やタイ語で観光地名が書いてあることもあるが、日本語が読めると便利である。宮谷(2005:172-173)が指摘するように、読解教材はまず学習者のニーズを知り、「何を読まなければならないか」、そして「読んで何をしなければならないか」を明確にした上で作成されるべきものである。本調査から明らかになったのは、タイの観光ガイドにとって読む必要度が高いものとは「予定表」であり、読解教材は予定表でよく使われる地名や語彙、漢字を含んだものになるべきである。そのためには千葉(2009)のような観光用日本語にとってどのような漢字が必要かを考えた調査などが必要となる。また、EGの意見にもあったが、一語一語を正確に読めることは必要ではなく、「エメラルド寺院」という文字を見て、「ああ、これはワットプラケオだな」とわかればよいという。このような読み方が身につくような教え方が必要となる。

3.2.2 書く能力

次に、書く能力についてはどうであろうか。EG の意見によると、読む能力よりは重要度が低い。10 人中 4 人の EG が全く必要ないとし、残りの 6 名も自分の名前とニックネームが書ければ充分だという回答であった。これは、日本人を含む外国人にとってタイ人の名前は聞き取りにくいと、音声だけではなく文字で示した方がわかりやすいからだと考えられる。前節 3.2.1 と合わせて考えると、ガイド用の日本語教育においては書く練習をする必要はあまりなく、読む練習に重点を置くべきであると言えよう。ただし、読む能力と書く能力の関係など今後さらに研究されなければならないであろう。

3.2.3 他の言語能力

ここでは読み書き以外の能力について EG がどう考えているか見てみたい。発音、文法知識、専門用語と敬語のそれぞれについてどの程度求められるかを順に見ていく。

まず、発音に関しては「発音の間違ひは誤解を招く」、「早口になりすぎずに話すことが大切」などのコメントからわかるように、10 人中 8 人の EG が重要であると答えている。「容易に理解される発音(intelligible pronunciation)」というものも聞き手や文脈による部分が大きいと、どのようなものか定義することは容易ではないが(Derwing & Munro2005)、これがガイド用の日本語教育の一つの目標であるのは確かである。

次に、文法知識に関しては「もちろんあったほうがよいが、それよりも意思伝達のほうが重要」、「母語話者ではないので、誤解なく伝えるほうが重要」といったコメントにも表れているように、それほど重要とは考えられていないようである。ここでいう文法知識とは、野田(2005)も述べているような正確さ重視の文法あるいは骨格部分重視の文法であると考えられる。それらから、目的を達成できる文法へあるいは伝達部分重視の文法への転換が求められているのではなかろうか。

専門用語に関しては、「重要ではあるが、経験とともに身につく」、「自分で調べたり、日本人に聞いたりしても身につく」といったコメントがあったように、重要ではあるがそれを学生がすべて学習する必要はないとも言える。むしろ、「難しいことばを使わなくても伝えられる能力が重要」という意見が多かった。ある EG が挙げてくれた例としては「モーニングコール」という専門用語を使い「あしたの朝のモーニングコールは 7 時ですよ」と言わなくても「あしたの朝 7 時に電話がありますよ」と言ったほうが伝わりやすいというものがあった。Dornyei(1995)などが指摘するように、非母語話者にとって言語能力の不足を補うコミュニケーションストラテジー(CS)が重要である。これには例えば、「言い換え」(伝えたいものの名前がわからないときにそれを説明すること。例えば「栓抜き」がわからないときに「瓶を開けるもの」と言うこと)などが含まれる(Dornyei1995:58)。タナサンセーニー他(2005:215-216)では日系企業がどのような人材を求めているかなどを調査している。それによると、専門用語は会社に入ってからでも身につくし、それよりも未知の語に出会ったときでも自分で問題解決できるような能力を養うことのほうが重要であ

るとの企業側からの指摘を受けている。もちろんよく使う専門用語(ガイドであれば歴史、建築や仏教用語など)を教えることも大切であるが、それ以上に CS の上達を含めたコミュニケーション能力の育成をも視点に入れた教育が重要であろう。

敬語については、VIP グループを案内することもあるので、尊敬語や謙譲語が習得できればそれに越したことはないが、ほとんどの EG は必要以上の敬語を使う必要はなく、「～です」や「～ます」を使えば充分で、親しさを表すために場合によっては普通体をも使うという。ただし、過度に失礼にならないように表情や身振りといった非言語要素も混ぜながらでなければならないという指摘もあった。このような親密さを表面に出すガイドの態度が日本人観光客側からどう受け止められているかなどを調査する必要があるが、少なくとも学習初期段階の学習者に対して尊敬語や謙譲語など敬語を重点的に教育する必要はないと考えられる。

以上 4 つの要素以外に必要な言語能力について、先行研究ではほとんど触れられていないものが一つあった。それは日本語の様々な方言を聞き取る能力である。半数の EG が「初めは全然わからなかった」など、仕事を始めた当時の苦勞を語ってくれた。確かに、คาฐุมิ และคณะ(2001)の第 1 課から第 10 課までと คาฐุมิ และคณะ(2002)の第 1 課から第 7 課まで⁽²⁾の 17 課の観光場面に登場する 24 人の日本人観光客(添乗員 1 人を含む)の中で東京方言以外を話している人は見当たらない。また、高田・千葉(2007)には関西方言を話す観光客が登場するが、1 人だけである。「観光客は日本各地から来る」という視点は今までの教材にはほとんど見られなかったものである。ただ、日本語の方言と一口に言っても実に多様であり、それを学習初期段階の学習者に教えるのは難しいであろう。この段階では「聞き返し」などの CS を活用することを教え、それ以降の学習段階で関西方言などのよく使われる表現(「あかん」、「～へん」など)を教えるようにするとよいのではないだろうか。

3.2.4 言語外の能力・知識

最後にガイドに求められる言語外の能力・知識について見てみたい。もちろんガイドにとって最も重要なことの一つに「自分の国について知っている」ということがある。これに関してはほとんどの EG も「タイについて知っていることが重要」、「タイ語で説明できないことは日本語で説明できない」などと述べており、その重要性は明らかである。ただ、これら全てを教えることは日本語教育の範疇を超えている。一つ教室内で教えられることとしては「タイの歴史的出来事を説明するときに日本の時代に置き換えて説明するとわかりやすい」ことが挙げられる。例えば、「こちらの建物は日本の明治時代に建てられました」といった説明は日本人観光客にとっては理解しやすい。

これ以外にガイドが知っておくべきこととして多く挙げられていたのは「日本とタイの違い」であった。これには時間感覚や文化習慣の違いが含まれる。ほとんどの EG が指摘していたように、多くの日本人観光客は、休暇中であっても時間を守ることに厳格である。ガイドが待ち合わ

せに遅れるなどということは問題外で、少なくとも 30 分前には待ち合わせ場所に行くぐらいの心構えが必要である。また、観光地へ向かう際には、曜日や時間帯を考慮してできるだけ渋滞に巻き込まれないようなルートを考えることが必要である。とは言ってもバンコク市内では渋滞はある程度避けられない。その場合は観光客が過剰にイライラしないようにするのもガイドの腕の見せ所である(詳細は次節 3.3 参照)。この他に重要なのは「客の本当の要求を察して、できるだけそれに応えること」、「痒い所に手が届く気配り」である。日本人観光客は「あれをしたい、これをしたい」ということをあまり表に出さないのが、ガイドが「どこか行きたい所ありませんか」と尋ねるなどし、できるだけ時間を調整し、満足してもらえようようにすることが重要である。この他、日タイの違いとしては「BTS や地下鉄にトイレがないこと」、「有料トイレというシステム」や「観光客をホテルまで送る際のマナー」⁽³⁾などが挙げられた。

3.3 トラブル

ここでは日本人観光客がよく起こす、あるいは巻き込まれるトラブルについて検討する。表 2 にあるように、トラブルは大きく 6 つに分けられる。

表 2 よくあるトラブルの例

分類	トラブルの例
盗難	観光地やホテルの部屋で
(スリ・置き引き などを含む)	観光中の車内で(貴重品を置いたまま車を降りる)
	ホテルのセーフティーボックスから
貴重品の紛失	空港、観光地やホテルでの現金、パスポートや航空券の紛失
	セーフティーボックスの鍵の紛失
健康	辛いもの、または屋台の食料・飲料による下痢
	高血圧など持病の悪化
	日射病、または日本での仕事の過労によって倒れる
物売り	観光地でだまされる、または土産を買うことを強要される
時間	観光客が渋滞にイライラする
	観光客がサービスの遅さ(レストランなど)にイライラする
施設・設備	車やホテルの設備(冷房など)が壊れる、または不充分

盗難と紛失はある意味紙一重ではあるが(本当に失くしたのか、すられたかなど)、ここでは別に分類する。これら二つはよく起こり、しかも一旦起きてしまうと、①警察や大使館との連絡に追われる、②被害者や同じグループ内の被害者以外の観光客にも気を使う、③ツアー継続のために他のガイドや、所属する旅行会社の支援を受けなければならないという点でガイドにとっても

非常に大変であるとの回答が多かった。そのため、なんとかして起こらないように努める必要がある。そして、不幸にも起きてしまった場合には被害者側の立場に立ち、あまり心配する必要がないということを強調し、パニックにならないように対処することが重要である。

3 つ目の健康に関するトラブルも比較的によく起こるようで、症状が軽い場合であれば、部屋で休んでもらったり、ホテル囑託の医師の診断を受けてもらう程度で済むが、症状が重い場合は病院に連れていかなければならず、ツアーの継続に支障が出ることもある。そこで、「こまめに観光客の状態を観察する」、「炎天下で説明するときは観光客を日陰に移動させる」、「移動の車内では説明をやめ、観光客を休息させる」などの対応が重要である。また、病気ではないが、まれに観光客が交通事故で死亡することもある(ライトアップされたアユタヤの寺院を撮影しようとして車にはねられる)。これは当然絶対起こらないようにする必要があると言えよう。

4 つ目の物売りとのトラブルは上記 3 つほど EG からの指摘は多くなかったが、起こってしまうと観光客のタイに対するイメージが悪くなるなどダメージは大きく、それ故できるだけ避けなければいけない。具体的には、物売りが「40、40」と言うので 40 バーツだと思い購入すると実は 40 ドルだったという事例があった。この点についてもガイドは注意を喚起する必要がある。

5 つ目の時間に関して前節 3.2.4 でも、観光客が過度にイライラしないようにすることが必要であると述べた。具体的な方法としては「お客様、ここはタイですから」あるいは「ここは日本じゃないですから」といった日タイの違いを強調しつつも、できるだけ和やかな、やや冗談めかした態度をとると日本人観光客もあまりイライラしなくなることが多い。また、6 つ目の施設や設備のトラブルについても同様である。

4. まとめ

4.1 結論と提言

これらの結果をまとめると以下ようになる。

- (1)EG が日本人観光客をよく案内する観光地は全部で 11 あり、それらはバンコクおよびタイ中部(アユタヤ、ナコンパトムおよびラーチャブリー)に集中している。
- (2)日本語ガイドに求められる読む能力は「予定表が読める」能力であるが、書く能力に関しては自分の名前やニックネーム程度で充分である。
- (3)読み書き能力以外で最も求められる言語能力は、わかりやすい発音で話せる能力、難しい専門用語がわからないときでも違う言葉で言い換えられる能力と「～です・ます」体で話せる能力の 3 つである。
- (4)言語以外で求められる能力・知識は「タイを知る」と「日タイの違いを知る」である。
- (5)日本人観光客に比較的によく起こるトラブルとしては「盗難」、「貴重品の紛失」、「健康」、「物売り」、「時間」と「施設・設備」の 6 つがある。

以上の結果から、本稿では以下の提言をしたい。

- (1) 限られた学習時間でガイド用日本語を学ぶ学習者には、バンコク、アユタヤ、ローズガーデン、そしてダムヌンサドゥアク水上マーケットを回る3泊4日ツアーを含んだ教材を提供する。
- (2) 読み書きの練習は、書き練習に時間を使うよりも、予定表を読めるようにするような読解練習を主とすべきである。
- (3) わかりやすい発音を習得するための練習方法、ガイドにとって有益なCSとは何かなどを明らかにするような研究がされるべきである。また、日タイの文化の違い等も教材に含めるべきである。
- (4) トラブルを防ぐために「注意を促す」、「リスクについて説明する」、「健康状態を確認する」などの機能を盛り込んだ教材が開発されるべきである。

4.2 今後の課題

本調査では種々の有益な情報を得ることができたが、観光地以外の場面にはどのようなものがあるか、また観光地でガイドが何をしなければあるいは言わなければならないか、つまり必要な機能や文型などに関しては調査できなかった部分も多い。また、本調査は長年の経験を持つ10人のEGを対象に質的調査を行ったので十分な妥当性があると思われるが、これに加え量的な調査(他のガイドを対象にした質問紙調査等)を行えば、本調査で得られた情報の妥当性はより増すと思われる。さらに、旅行会社側や日本人観光客の視点を取り入れた調査も当然必要である。これらを今後の課題としたい。

注

- (1) そのような観光地の例としてバンコクのワットサイ水上マーケット(ตลาดน้ำวัดไทร)がある。
- (2) ศาธุมิ และคณะ(2002)の第8課から第10課までは「旅行会社のカウンターで」なので、ここには含めなかった。
- (3) 観光後にホテルまで送った際、ホテルに到着したからといってすぐ帰るのではなく、観光客がエレベーターに乗るのを見届けてからガイドはホテルを出るべきだというマナーを指している。

参考文献

- 清ルミ(2003)「「つまらないものですが」考—実態調査と日本語教科書との比較から—」『異文化コミュニケーション研究』第15号、神田外語大学、pp.17-39
- 清ルミ(2006)「禁止の場面における現実の言語表現：医師と美術館員の場合」『世界の日本語教育』第16号、pp.107-123
- 高田知仁・千葉真人(2007)『新観光ガイドの日本語基礎編』กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์มหาวิทยาลัยสยาม
- タナサンセーニー美香他(2005)「ビジネスで使う日本語を考える—企業と教育現場の視点から—」

- 『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、pp.207-222
- 千葉真人(2009)「タイにおける旅行会社の日本語広告に見られる漢字の出現頻度－日程・費用・条件等を対象として－」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第6号、pp.125-134
- 長町聡子他(2006)「ラチャパットの観光学科のための観光日本語用シラバス」作成について『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第3号、pp.97-106
- 日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』、凡人社
- 野田尚史(2005)「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語文法』、くろしお出版、pp.1-20
- 羽太園・上田和子(2008)「初級からの専門日本語教育」への視点－関西国際センターの実践研究から－『国際交流基金日本語教育紀要』第4号、国際交流基金、pp.41-54
- 宮谷敦美(2005)「読むための日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語文法』、くろしお出版 pp.167-185
- 森康眞(2008)「コース用教科書「JPN336：観光サービスのための日本語」の作成過程を振り返って－教材の作成前・作成作業・作成後－」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第5号、pp.97-106
- ラクトマナナ アンビニンツァ スルフィニアナ(2006)「マダガスカル人日本語ガイドのための「観光日本語」シラバス作成」『日本言語文化研究会論集』第2号、日本言語文化研究会、pp.277-302
- Derwing Tracey M.& Munro Murray J. (2005) Second Language Accent and Pronunciation Teaching: A Research-Based Approach. *TESOL Quarterly*, vol.39, no.3, pp.379-397
- Dornyei Zoltan. (1995) On the Teachability of Communication Strategies. *TESOL Quarterly*, vol.29, no.1, pp.55-84
- Iwata Yuka (2009) Curriculum Design for the Tourism and Hospitality Japanese Course at the University of Guam. *Japanese-Language Education around the Globe*, vol.19, The Japan Foundation, pp.125-139
- Mulvihill Elizabeth A. (1992) Designing a Japanese-for-Specific Purpose Course: Putting Theory into Practice. *Japanese-Language Education around the Globe*, vol.2, The Japan Foundation, pp.171-197
- คาฐุมิ ศรีจักรวาท และคณะ (2001) ภาษาญี่ปุ่นภาคธุรกิจ 1. กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์ภาษาและวัฒนธรรม สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี(ไทย-ญี่ปุ่น)
- คาฐุมิ ศรีจักรวาท และคณะ (2002) ภาษาญี่ปุ่นภาคธุรกิจ 2. กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์ภาษาและวัฒนธรรม สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี(ไทย-ญี่ปุ่น)